



吾生れて世にはぐれたる
迷ひ子の、筆を焚いて歸ら
んに、既に弓を持ちて野
に立てり、射手の弱きに矢
開きせんは早かれど、吾一
張の弦無き弓、放たぬ征矢
にも響きなからんや、

目次

妹	一
胡蝶の墓	五
紅芙蓉	八
希臘半島	十
湯の香	十九
蛙の聲	二十二
いさよふ雲	二十四
行く春	二十七
こゝろ	三十二

頁數

漫吟	小羊	春風怨	朝の聲	夕の聲	露の玉章	ちぬの海	月のはな	やほじほ	みづわか草	大雪小雪
.....
七十三	七十一	六十五	五十九	五十九	五十四	五十	四十四	四十二	三十九	三十六

戀の神	曙の里	經木流し	天女の聲	山水秀	自然の文	星の光	牙ゆる夜	花すみれ	あじろ守	浦なれ衣
.....
七十六	七十九	八十四	九十三	九十六	百四	百七	百九	百十二	百十七	百二十

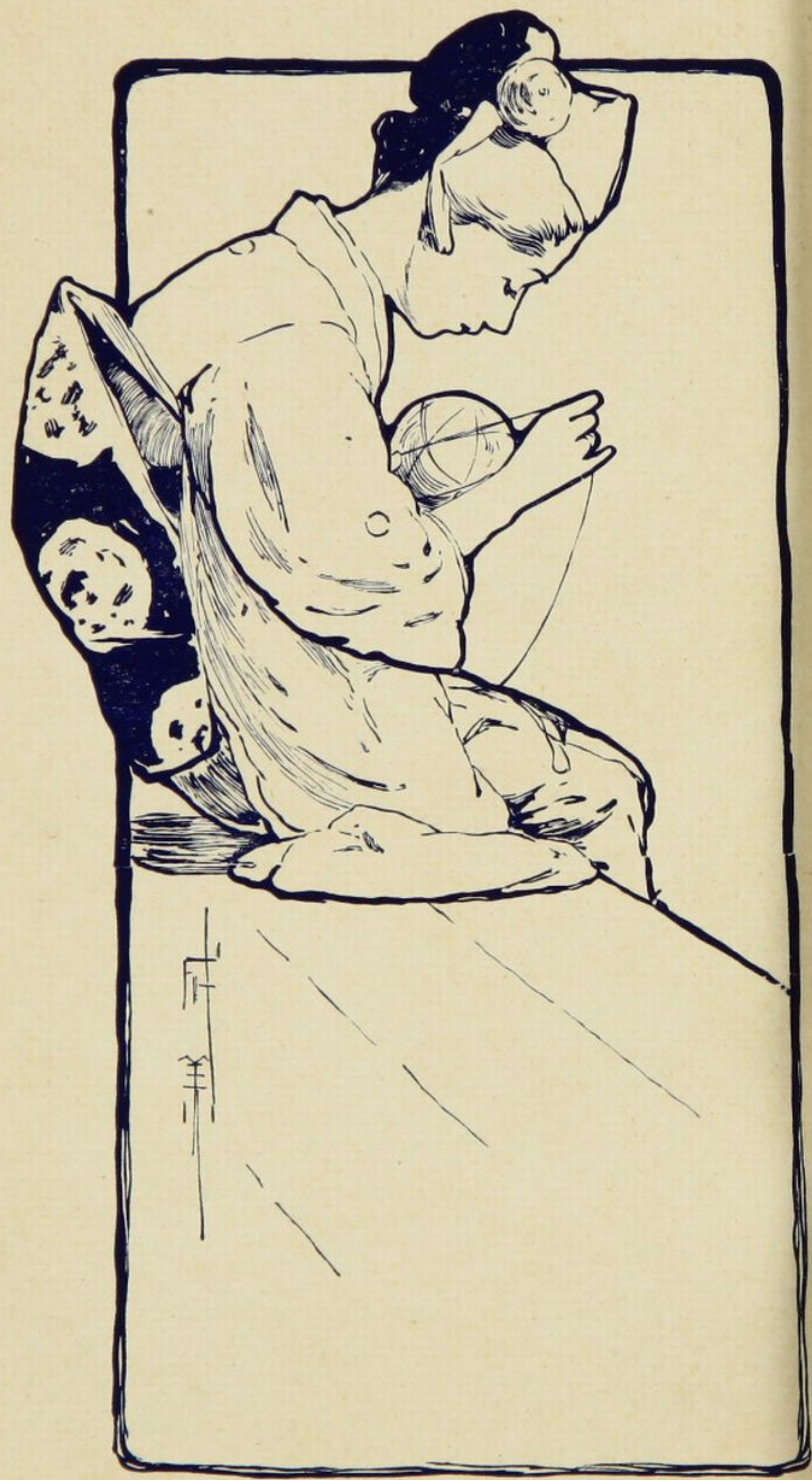
無弦弓

河井醉茗著

妹

人に隠れてさびしくも
詩にすさみたる一人子の
われに持つべき妹を
憾みや神のわすれたり
くち紅さゝず髪あげず

残る心	百二十三
罪の終	百二十六
征午獵矢	百二十九
表紙口繪	一條成美
挿畫六葉	一條成美



容^か貌^まをさなく筆執りて
 吾家の日記を書しなば
 あゝ我歌をなげうたむ
 世の荒磯をわたるべく
 餘りに波のしづかなる
 ちぬの浦わに二人住まば
 星の若きも戀ひざらむ
 白きむらさき紅梅の
 膝にみだるゝきぬ糸を

君いと巻にまかんと
戀せぬ胸やとけやすき

只美しくしきいつはりを
戀と名づけて酔はんにも
葡萄の味を知らぬ吾の
など杯をふくまれん

生命の橋に手を取らば
渡りやすかる水の上に
愛は清くもうつらんに

一人の影のさびしさよ

四

簑笠に棹取る身さもならばなれ
君をわたさはみゝる足るべく

朝もよし紀路の浦わに山はあれど
妹に見せんは玉津嶋の山

小さき星落なば袖に包まんを
いつまで人に遠ざかるらむ

胡蝶の墓

胡蝶よさむること勿れ
われ等がつきし奥城に
春は花咲くあしたまで
再び覺むるおとなかれ

萩は實になる秋のはて
秋海棠のはなは折れて
冷たき露もふかゝるに
うべ弱き羽の萎れけむ

五

廣き芭蕉の葉の面すら
細く裂いたる西かぜに
翼いためず地に落ちて
眠れる蝶の小さきかな
わがたなごゑに打載て
いき温かに吹きぬれど
さめぬ姿をくづさずに
葬りて置くあきの日や
寒きに覺むるゑと勿れ

美しくしき者は脆かるに
觸れろ冷たきかぜの音
土をかつぎて静かなれ
花をわけたる移り香は
とはに彼女の抱けるを
くらき林に吹きさわぐ
あらしは何を埋むらん
よき夜惜み宿直のひまをかうらん
月にかさすや狩衣の袖

紅芙蓉

人のキッスを許さる
未通女の胸に咲き出て
花あたらしき芙蓉かな
おぼさじとあろ包みたれ
露はあしたの風に落ち
未通女の膝におぼれたり
血汐やかよふうす紅の

ふれなば裂けん花瓣に
誰かは歌を書き得なむ
はなの繪筆を紙に載せ
をとめさびする葉隠に
秋は雲あそあふがるれ
一葉の葦のふね吹きて
眠をさそふふとあろに
花や未通女の夢を見む



希臘半島

バイロンの DON JUAN 中の一節の意を

アナカの山はたかく聳はて
 マラツンの野を前に望めり
 マラツンの野は廣く開けて
 鳴多き海をまへにのぞめり

希臘の海、希臘の山
 デロスのみやるアテナの像すゑ
 島は昔にかゝやさわたれ

國のちからは既にほろびぬ

英雄の詩はホーマーに起り
サツポウの歌は戀に残れり
今は祖國の岸をはなれて
高さしらべも西にうつりぬ

此野に負けて屍となりし
ペルシヤの人の墓場を踏めば
奴隸の國はおとろへたれど
なほ獨立をゆめみるなり

むかし高きに王坐をまうけ
サラミス灣を見下しながら
わが水軍のおほきをほあり
ペルシヤの王の奮ひし時よ

あけに敷へしいくさの艦は
夕日を待たで沈められたり
勝を描きし王のまなまに
うつるは水と雲のいろのみ

負けたる者はふたふた

あゝ勝ちし國何處にありや

新月の旗ひらめくとあろ
ギリシヤの島の草も靡けり

かちどきの聲響きはながく
保ちしうたは勇ましかりき
時なるかなや戀の詩つくる
よわき吾等を憤慨らしむ

土地よ、汝の胸よりかへせ
三百のうちスバルタ人の

三人なりども吾等にかへせ
きけテルモビレ、血は乾くども

吾等はゆかん、一人なりとも
地の上に先づ起つ者あらば
吾等はゆかんさりながら君
若きかれらは凡て黙せり

然り、止みなん哉

止みなん哉われ

サミアンの酒もて

この杯をみたせ

土耳其の民にいくさは委ね
われは葡萄の酒に酔ひてむ
ヒーリックの名は方陣よりも
舞踏の場にわすられざらむ

カドマスの手に習ひし文字も
アポロの神にさしけし歌も
奴隸の子等にのゑるを惜む
寧ろ舞踏のふりを強ひんや

サミアンの酒もて

この杯をみたせ

酒に歌ひしアナッリオンも
なほ一度は人につかへぬ
同じギリシヤの島人ならば
王を仰ぐも耻辱ならんや

土耳其の軍威、羅馬の略
汝等が楯はあやふからんに
スリの山ざとパルガの岸邊

勇士の血統は傳はらざるか

サミアンの酒もて

あの杯をみたせ

國ほろぶれども歌は優しく
葡萄の樹蔭に少女は舞へり
美はしき子の姿をみれば
涙は人を酔はしめざるなり
入江の風のもすそかへすを

支ふる手には國もなからむ
愛にみちたる胸をひろげて
やがて奴隷に乳を含ますか

吾さゝやきは波にかへして
大理石もてたゞめる岩に
神よしづかに眠らしめよ
奴隷のくにはわが國ならず
其さかづきを

衝き落せ

湯の香

少女の爲に

ゆふべの雲に伴なはれ
箱根に入るや秋ぐさの
花の色さへさびしきに
つくらぬ眉のをさな貌
むかしをとへば芒生ひ
亂れし石のはざまより
巖が根傳ひくさむらに

かくれてゆきし水の音

泉の神の類をふれて
あたゝかにある湧出れ
知らずや浴む塵の子の
ろの滴だにふくまざる
湯槽に眠るわらは女の
胸乳ともなき胸の上に
浮世の浪やうたざらん
姿も透いてみゆるかな

秋はつゆ置くはな妻の
萎れて消ゆる運命なりや
眠れ玉なす湯のうち
湯の香の失せて涸るゝ迄

蛙の聲

村にすぐれし少女子
明日は嫁入る日なりけり
雨ふり出でし小山田に
蛙のこゑはなほやまず
霧れんと待し雲とどて
小雨の中にいもとせの
契りかためん日はくれて
蛙のこゑはなほやまず

少女の幸をよろこびて
雨をわすれしむら人の
酔ひて歸れる此あさけ
蛙のこゑはなほやまず

太作がかどの苗しろも
植附るべくなりぬれど
太作も出ず雨もやまず
蛙のこゑはなほやまず

いさよふ雲

風しづかなる朝な
少女が家のそらたかく
とゞまる雲の一ひらに
嬉しき色のうかぶなり

風ふきそよぐ夕な
少女が家のらたかく
とゞまる雲の一ひらに
悲しき色のうかぶなり

朝ぎよめするあけ姫の
影もしづかに消去りて
のあるか袖の横ぐもに
別れてはしる小さき雲

燃ゆるがとどき夕映の
またく暇に跡もなく
暮ころせまれ谷の戸に
あくれて歸る小さき雲

明けぬ暮れぬと
祖復る

少女のさとは遠けれど
通へる雲はひとひらの
遠き戀あろつゝみたれ

雲のこゝろは覺り得で
空しく人になりはてん
少女よかへれあまつ空
光はどはにわかゝらむ

行く春

落花のかぜの白うして
春波けふれる江上を
小籬捲あげて見る君の
懐なごみはとほく盡きざらむ

げに歌人をなやまする
春の行方も知らなくに
嵐はいためあめはうち
亂れ亂るゝ八重つばき

我に微吟のうた成りて
君が絃聲絶えんとき
たけなはなりし春の夜の
星をかぞへしるれも夢

歌書きませと強ひぬれば
酔の紛れにさらく
筆はしらしゝ舞あふぎ
墨のほひは残れども
うま酒醒めて聴つくす

薄命に世をいたみ
司馬の涙をろゝぎては
わかちかねたる袖と袖

立舞ふ間のみぢかきに
あわたしくも櫻散る
はるの心はわかれゆく
きみが心に似たりけり

歌吹海裡のゆめのせて
せんりをくだる兩岸の

越山吳山たゞあほく
柳はさらにながしらむ

わがいのちこそ一筋の
其ともづなに繫ぐなれ
こゝろしあらばこの夕
はるの潮の満ちざれな
多情は似たり情無きに
君玉のどとうつくしく
我塵のごとかるき身の

いつ迄共にまみえなむ

なみだぞかゝる欄干に
君を送りてたゞずめば
雲なき空のをちかたに
春のひかりは沈みゆく

十津川や北上川に筏くみて
海に出でんは幾年の後

こざくら

墓場の苔に小ざくらの
はなちりかゝる雨の夕
面影にしてかへるとも
父はもいまや家ならず
世づかぬ吾の子なれども
さすが産毛を撫てし時
餘りにむねの若ければ
親といふにも憚かりし

黒髪ながくうたけて
花の小櫛にけづるとき
詩にはてゆく吾をすら
親と呼ばんは誰ならず

吾子よかへれ

うつし世に

花は根になる
はるのくれ

人けつれなき

せめては汝を
のますべく

なれし軒端を

守るは去年の
つばくらめ

つばくらめこそ
かへらめど

歸らぬ稚子よ
いとし子よ

など歸り來ぬ
ながちしは
遠く行くとも
告げざるに

大雪 小雪

大雪こゆきふりしきる
都のまちは小夜更けて
闇にすかせばほの白く
ひと筋ほそきよみ小路
吹雪の風のたけく
をさなき稚子の聲するは
あはれ添乳の夢さめて
知らぬ軒端に泣けるなり

世を捨てゝあそ最^い愛^ひき
吾子も雪にすつるなれ
産衣の袖のゆたかなる
幸はも持たで生れけむ
凍ゆる迄のいのちぞと
神に任せて去りにしを
かゝる夜に來る雪女
人ならぬ手に拾はれぬ
雪ふる夜毎みやみ路に

稚子の泣く音は聞ゆれど
いだける人の影はたゞ
雪に紛れてみえわかず

つれにたく香爐の香さきゝますか
胸しづかなれ戀をあやまたむ
高きの一夜語りの花を惜み
箱根の山のはこに秘めてむ
膝の上に稚子抱きのせて君と共に
今宵の如き月もみしかな

みづわか草

津國阿部の奥城に白木の墓標新らしく『牧某氏何子美
百若草は妙耶女之墓』と書きたる、まねかむ十七歳を
一期として空しく神去りし彼女が形見にぞある。

妻と呼はるゝ幸なさは
妻となりてぞ覺るなる
涙なかけそをとめ子の
魂のゆくへや迷ふべき

春のひかりにわか草の
自づと萌はし戀ならば



世を秋風のうらみなく
 たゝ柔かに生ひぬらむ
 よわき心をつゝみたる
 よわきむくろは荒金の
 土にかへるも天づくに
 常未通女にて在すらめ
 か黒き髪もほつれずに
 花の小袖もそのまゝに
 たゝありし世の姿にて

棺のうちにあさめしを

有縁無縁にふきわたる

松の嵐のあゝろなきも

みづわかかくさの郎な女は

神にしませばなからん

ゆめはなからん

やほトほ

其舟かへせあまの子よ
野にも山にもあき果て
あゝの磯べに逍遙へる
我にかしき歌もあト
浮世の岸をとほざかり
幸ある沖にひとりゆく
いましと共に漕出なば
たのしからまし海の色

真帆や片帆やゆき通ふ
舟路の果は知らなくに
浪のまにく空ひろき
雲のゆくへを追はむ哉
いそ馴松のおのづから
真砂に生ひし身なりせば
胸は玉藻ときよからむ
其舟かへせあまの子と

月のはえ

月蝕の夜、常陸なる夜雨を懐ふ

神のみあとを傳へんと
はるか望みし人の世に
濁ると知らで下りけむ
ほしは光をかくしけり
星の消ゆしをみ空なる
星より星にさゝやきて
女神のおはすもち月の

かゝやく宮に傳へけり
つきの女神の星の上を
いたく哀とおぼしつゝ
憎みたまふや人の世に
光かくさふ雲召せど
雲はかへらずひめ神の
自らひそみたまへれば
月はみるく影失せて
闇になりゆくあめ地や

あ
ら
ゆ
る
星
の
現
は
れ
て
月
を
い
さ
む
る
あ
ま
の
川
河
波
き
よ
く
な
が
る
れ
ど
又
仰
ぎ
得
ぬ
ひ
か
り
か
も

*

*

*

*

葉
山
繁
や
ま
ち
も
ひ
入
る
筑
波
の
山
は
ふ
か
け
れ
ど
う
き
世
に
あ
さ
き
男
子
の
今
宵
も
月
に
む
か
へ
る
を
影
ゆ
く
り
な
く
消
え
し
よ
り

胸
は
な
や
み
に
鎖
さ
れ
て
ミ
ユ
ー
ズ
に
祈
る
赤
心
の
う
た
の
想
や
盡
さ
ざ
ら
む

世
に
デ
イ
ヤ
ナ
の
神
な
ら
で
慰
め
も
無
き
わ
か
さ
子
の
ト
ラ
モ
ス
山
の
絶
頂
に
眠
ら
む
こ
と
を
願
ふ
ら
む

女
神
の
た
ま
ふ
夕
つ
ゆ
の
月
の
し
づ
く
を
袖
に
う
け

痛める胸にろろぎしも
今はつれなき闇のろら

かばかり濁るうつし世に
夜の光のなかりせば
清けき影をなに見む
長き眠りもやみにして
忽ちかかろうすぐも
ミユーズの神や乗りまさむ
雲のゆくまに現はれて

つき長へにさやかなり

ちぬの海

かへりみすれば大伴の
高師のはまは遠にして
月に湧くなる八百沙の
淡路をはてかちぬの海
宇奈比男とあひきをひ
妻とひしけんますらをの
はやち吹捲く沙さるに
ふなのりしけむ渚かも

行方もしらに雲のはて
天とぶ雁のさかりゆく
聲にまぎれて櫓の音の
戀に聞く夜やつらかりし
ふぢねのうらに鱧つる
蟹の子ならでうつゆふの
こもりてたけし津國の
芦屋處女のおもかげや
長きくろ髪たがねつつ

さしも小櫛のみだれざる
氣高きふりの夢に入りて
うつたへにあら戀渡れ
怪ううつるものけに
いまと昔をたがへけむ
戀つつあらむ術なさに
うつつともなく舟にのる
清水湧くてふ和泉路の
ちぬ男とはうまれしに

見まく欲するくはし女の
芦屋の里に今もあらんか

あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし
あまも思ふて大いし

露の玉章

君が送りしむらさきの
絹紐ヌイに挿しし松の葉を
抜くに吾手の震ふまで
ふかき思をつたへしよ
歌は秘すべき人の世に
つゆの玉づさ交せども
たゞ詩の神の前にこそ
吾等二人はきよからめ

七いろゑがく虹のごと
消やすき戀の帯しめて
くくるに易き胸ならば
わが前髪はみだれじを
瞳子の露のきらめきて
まほに語りし夜は無けれ
一目にしるきただ人の
世にうらぶれし果ならず
さしひく汐にみつ禽の

羽音さびしきいろの風
君さりげなきため息の
胸に覺ゆしゆふべかな
心にねくるまつはらの
別れは夢とさめずして
かへらぬ雲はいづ方の
袖ふる山にかかるらむ
戀ならませば裾に摺る
ころもの色と亂れんに

亂れざりけり正しくも
亂れざるこそ苦しけれ
苦しといふも戀ならば
リポンの絹の紫の
只なつかしく慕はしき
思よなににたとふべき
知らぬといふも惑にて
悪魔の手より放ちたる
戀のさつ矢の射ぬきなば

吾はたほれむ君が腕に

袖裏に断つべきたげは教へたれど
都の紅絹に歌は書かずりし
梅もどきなるてんの實と枸杞の實と
花は山茶花しら菊の花

朝の聲夕の聲

夕の聲

たゞ一つきのうま酒に
胸の血しほは狂ひろめ
酔ふて匍匐ふ真砂地に
夕のこゑを聞かんかな
カタンの影や包みたる
くもは南にたゞまれて
茲にしはしは世を咀ふ



夕のこゑはとほざかる
天使の星のたゞふたつ
闇よりさきに現はれて
美しき世をかたり合ふ
ゆふべの聲は近づきぬ
松の葉越につたへきて
遠く寄せては遠く去る
はるの潮のひゞきにぞ
ゆふべの聲は残るなる

光とやみとうすいろに
別れもあへぬ大みろら
夕のこゑのしづけさに
歌はぬものは月とわれ

朝の聲

神の子

つかふる山に幸あれよ
つかふる海に幸あれよ
曉のみ神のりたまふ
朝のこゑのほがらなり

人の子

通志馬行くうまや路の
鈴の音よりあけろめて
夢より起きし人の世の
朝のあゑぞけがれなき

神の子

水^み 鶺鴒^{すずめ} 刈^き てるてふ信濃路に
打羽ぶきゆくあら鷺の
翼のかぜのつよきごと
あしたの聲は空に満つ

人の子

母の添乳に添ひあきて
ふしどを脱けし嬰子の
わけなき節の歌のごと
朝のあゑにあやぞなき

神の子

愛の姫がりつかひして
かへさに置きし我袖の
露をはらへば小草にも
あしたのあゑの情あり

人の子

袖のまくらに嬉しさを
つゝみてかへる舞姫に
ひかれて伸びし青柳の
朝のこゑはほそやかに
神の子
あしたのあゑの後ろにぞ
ゆふべの聲は近かるに
君と我とはきかずして
いざや別れむ
かへれ人の子

春風怨

せめて女とうまれずば
たらちのあやのみ心に
背きまつりて悩むまで
深くも罪はつくらじを
あひの俘となりはてし
心にあゝろまかしかね
身は春ならぬ花のころ
ろらもくもるか八重霞

結むすびしもの
親おやと親おやと
縁ゆかりにあ
諾うたなはざ
ればし辛くるき
世よや

進すすまぬあし
たたとれれば
今いま日ひ來きし
胸むねはは蝶てつ
いいつつししかかいいででしし
渡わた場ばの

柳やなぎががくくれれにに立たつつ
そそれれぞぞとと母ははのの告つまますす
ままたたもも心こころののああくくれれつつ
いいつつのの世よりりのの習なら癖はしにに

一ひと目め面おもてをを見みかかははししてて
千ち代よのの契せきををむむすすぶぶららむむ
かかたたみみにに影かげもも見みぬぬ人ひとのの

ああゝゝろろゆるゆるしし、
見まゆゆるるここととはは許ゆるさされれてて
ああゝゝ彼かの君きみにに

知らぬ男を背と呼ぶも
いもの誠はつくされず

汀のかぜにひらくと

さくらあぼるゝ舟の中

乗よどあるに術もなく

小褌かゝげて移れども

伴なふ者はのりもせず

たゞ其ひとゝ二人のみ

渡すが水夫の何氣なく

はやさしいだす水馴棹

情ありとも行くみづに

うかべるはなは意なく

一つ小舟にわたらふも

岸はふたつに別れたり

むらさき匂ふわが袖を

小膝のうへに重ねつゝ

仇なる人に見られじと

片頬背くるおくれ毛や

泪持つ目にうなだれて
ものさへ言はぬ吾様も
戀のふちせに棹さゝぬ
水夫や知るべき歌の節
いやな風にも
なびけよ柳
いつか東風吹く
春もあろ

小羊

冬の夕日のさひしげに
廣き牧場の暮れそめて
枯生に風のおゑもなし
ねむるとみねし小羊は
永遠に去りて歸らざる
今日の夕をいのるなり
何をかいろぐ人の子の

夕もしらず朝も知らず
心焦られて騒げるよ

塵あぐるべき風に立ちて
雪なす毛さへ亂さすに
いかに羊のしづかなる

孰れ救場にはつる身の
たゞ休まずに急がずに
世は倦までおそ人はあれ

漫吟

自然の母にいだかれて
落るやなぎの葉にも
ふかき想をたどるてふ
やようら若きうた人よ

人の子をみる塵のごと
ひとりたかきに嘯きて
星と語らふ夜半にのみ
意味ある歌けなるてふか

吾生れたるひとの世を
魔族の淵とひたぶるに
遠ざかるべく迷ふなる
詩人よ胸のなどせまき
たい冷やかに静かなる
自然のさかひに遊ぶとき
世の係累はたゆるとも
熱き血汐はわかざらむ
けはしき中に平和あり

危ふき中にやすきあり
温うしてなさけある
八の子と語れ
うたぞあるべき

戀の神

神代なからの風かよふ
世に住吉のまつか根に
まばしまどろむ夢の中
戀のみ神のあらはれぬ
歌にかくれてあたら世を
狭うみてゆく人の子よ
眼をひらけあひはた

清くあるべし罪の爲に
戀はけがるゝ色ならず

滄浪の水にござるとも
こひのいづみは一筋の
清き瀬をこそつくるらめ

やよ歌人よ起きいでゝ
戀は神なりとこしへに
神はるますと叫ぶべし

世は驚かむうたがはむ
よし驚くもうだがうも
かみの使と名のりなば

はつせの山の

やまのまに

いさよふ雲を

いもとみし

いにしへ人の

こゝろはや

曙の里

晝はまぎれて聞えねど
庭のやり水さらくど
枕にひらくなつの夜に
ひとり寐待の月をみん

松かげながら蚊帳越に
冴えし光のむねに入り
想ひの羽のたゞかろく
去年にぞかへる和泉路や

高師の濱にわびねして
月にあさりし貝がらの
盡しかねたる歌反古に
にがき潮もかゝりけむ
思^{おもひ}屈したるわがいろを
病むとやみけん宿の子の
よろの情にさぐられて
片頬に笑もうかびしよ
ひとの涙のかゝらぬを

袖のうらみに返しては
松の葉ひろふ松が根に
小さき蟹こそかくれたれ
汐風ならで小夜更けて
あゑなき月に誰か訪ふ
あゝ吾友よあたらしき
浮世のうへを語れかし
ありし姿のをさなきが
あれかすめゆく月の面

さやに見ゆるを吾友の
たゝ白雲とみやるかな

それより今は國とほく
都のはてにさすらふも
里はあけぼの光りさす
若き望みのなからずや
静かに聞けばさらくと
やまず變らず行く水よ
相思ふ人のありもせば

今宵の夢をさそひゆけ

經木ながし

何處のやども干闥盆の
鉦うちしめる此ゆふべ
浦わづたひに波よけの
石垣とほきうみのかぜ
遠山のはをはなれたる
月や經木の文字よまむ
縁しもうすきうす墨に
俗名はなとはしりがき

人目をよけて東の間の
ふでのにはあひは拙きも
消えぬ誠のこもれるを
冥府の泉にながれゆけ
はなせばかろき浦風に
一葉と浮ぶわたつみの
波より波のはてもなく
またたく星のきえんとす
戀につなぎし玉の緒を

夢より脆く切りはてし
つれなき神は潜めども
のどかに打てり磯の波
いざり火消はて君一人
影なき闇に立ちしとき
花の裳裾に這ひよりて
碎けたりけんいささ波
なご死の神に誘はれて
まどひし人を支はざりし

か弱き胸に燃ゆる火を
冷たき音に消さざりし
此世のほだし断つ前に
よそながらにも覺りなば
何と加それと慰めて
哀のはてはみざりしを
妻をむかへし次の日よ
吾に残ししかきおきを
よみ返す手もわななきて

現なりともおぼへざり

あらはに洩らし給はねば
露さとりべきよしもなく
よそ吹く風と過ししを
つれなしとあろ怨みけめ

胸やみだるとき衣の
とけよと見やる眼さへ
毎に見熟しすずやかさ
只美はしとねもひてき

とみに言葉の打たえて
優しき眉のくもれるを
何偲ぶらんとひもせで
只いたつきと思ひてき

己がゆんでと君がめ手
重ねて涼むおぼしまに
くれなる染る頬の色を
をみな常と思ひてき

とく癒はたまへと朝夕に

病のとよをたづぬれど
やつれし面わ打ふりて
なに一言ものたまはず
落つる涙にいろあらば
おぞき我にも覺りしを
傳ふまくらの秋かぜも
露のおおろは知らざらむ
土もかわかぬにひ墓に
盆燈籠のかみやれて

きりが夢とてらしなば
夜ただ守るはやすけれど
かへらぬ魂は天づくに
戀しる神のみ手づから
いと安らかに守るべし
慕ひたまひる塵の世を
仰げばたかく星冴えて
更けゆく秋の静かなり
戀にはあらで戀になく

今宵と知らて
妻や待つらむ

筑波根の男神女神も眠らむ
よき夜を守れ二十八宿
一莖の草も佛になりぬべし
曰きは露か木蓮の花

天女の聲

春にさきだつしら梅の
清きかをりに誘はれて
江南の路とほけれど
夢路の魂やぬけいでし

巫山のみねは高うして
白雲とごすいただきに
楚王が戀のささめごと
松の葉風にのるらむ



三 玉 姿 夕 あ 神 い し み
 峽 の み は に し 女 は ほ ろ ど
 の み み そ た に は ほ き り
 ま ま え ろ た に ほ の き の
 え る ぐ 出 る と の と さ 菩
 る ぞ あ ぐ あ る 雲 と の 洞 滑
 聞 ま め と 雲 と の 洞 の 滑
 ゆ ま つ と 雲 と の 洞 の 滑
 な ま つ と 雲 と の 洞 の 滑
 る か せ 雲 と の 洞 の 滑
 ど せ 雲 と の 洞 の 滑

山をいづれば濁らなむ
世づき給はぬ姫なれば
うべこそ神に在すらめ
塵に生れしひとの子の
現にとはんよしをなみ
神女のかけを仰ぐまで
ゆめの浮橋絶はざれな

山水秀

高師の濱

なほも 嫗はかたるらく
月 洩る 夜半の片 びさし
昔の ちひのを かしさを
寢 覺にかたる 夫もあり
拾年の前にいとし子は
都のそらにのぼりしが

春と秋とのおとづれに
恙も無しと知らせ來ぬ
よしかへるとも 孤屋ひらの
何をゆづらむ 吾妻路に
望しあらば 待たずとも
子は子の上に 幸あらむ
世の姿とも さとらねば
沙の満干に いさりして
幾年なみや 寄せにけむ

夫も吾身もふりたれど

ふりしと知らぬ五十年は
静けき夢のただひと夜
障りといへば葦分けて
舟やる外にしらざれば
あれ見そなはせ此松の
陸になびかぬ枝もなし
世は吹く風に任せてぞ
安くいのちは終るなる

網干す夫や待つらむと
枯し木葉を籠にみたし
行くか姿もかくれゆく
松を隔ててながむれば
高師の濱は名のみにて
なみ高からぬ夕なぎに
稍のひまをかへり行く
白帆にさすやゆふ日影

寧樂の都

寧樂のみやこの八重櫻
紅葉する頃来て見れば
ありし榮の夢のあと
古きみ寺はゆこれども
みほとけ黒く雨しろき
幾よあらしや埋めけむ
緑のいらかおけむして
朱のほろ殿いろあせぬ
宮びとのわたりけむ

大路小路はれち葉して
むかし男やかよひてし
春日野あたり鹿ぞ鳴く
深きうらみをきぬ掛の
やなぎにのあす水の色
あひも位もゆめのまに
七堂がらんあきのかぜ

法隆寺

名も無き峯に暮初めて

やまもとけ
る班鳩や
里の小鳥の
かなしげに
なを呼ぶら
む法隆寺

おげほのぐ
らき金堂の
えがきし壁
を共に見て
赤裳裾曳く
をとめ子の
むかし語る
も懐かしく

黄金の色
のすすけた
るき佛を
をろがめば

我も千歳の
いにしへに
かへりも如
き心地して

自然の文

ねむりさめゆく空の色
ややに光をあらはして
野末に淡きやまのはに
ひき残されし夏がすみ

人の通ひしあともなき
緑さやけき田のくろの
名もなき草の下葉にも
おぼるる許り露置きて

昨日のゆふべ植はてし
水田にうつるあけ雲に
いささなみよる朝風の
かるき袂をふきかへす

つきぬ思ひも短夜に
なかばはなりし吾歌の
歌の續きをねもほへば
拙かりけりよべのうた
くらき燈にふでとりて

たどくしくも綴りたる
文字の心のいどあさき
をぞくもよしと許ししよ
自然のあやを人間の
寫すたくみの愚かさよ
愚かと知りて尙もまだ
筆すてかぬる可笑をかさよ

星の光

糸くりやめて窓の外を
うまごと共に打みれば
西のはやまは暮れはてて
水よりあはきろらの色
きらめく星を指ざして
見ろなはさずや祖母上と
教ゆる方をみまもれど
眼はきりのかかるなり

窓よりみゆる夕づつのか
かがやく迄も機織りて
ゆふべくと送りつつ
六十路餘りの年は經ぬ

人のもろさになぞらへて
變らぬものとは思はねど
なれかゆびざす星影の
見はわかぬ迄老ぬるか

冴ゆる夜

よく物の怪の祟るとて
はしらもたてぬ焼跡の
いしずゑのみぞ残るなる
枯生に月の冴えにたり

埋れもはてず苔蒸して
水しづかなるふる井筒
草木もねむるま夜中に
汲む人あるぞ怪しかる

たけの黒髪ふりみだし
雪なす肌にし氣なく
水垢離しけむ乙女子の
姿みたるはあらざめり

戀にやはあらぬ面影の
いたくしなほて力なみ
あかつき深く歸りては
霜にもあとは残らじな
少女通はずなりしより

捨もやらずに残りたる
つるべの水に人しれぬ
月はいく夜か宿るらん

君と吾二人乗るべき船をつくり
海原ゆかば戀の國はあらん
飛鳥風あすかの里に今も吹かば
大和の山をみなうたにせむ

花すみれ

なれし庵をふりすてゝ
心ほろくもわれ行くを
なれも泣かずやはな董
やれし垣根に寄添ひて
語るも問ふも今日迄ぞ
さらばよ董われ行かむ
行んといふを汝はしも

笑もて吾をとめつゝ
なほも思をまどはすか
おほし立てし人もなく
枯れゆく後も知らざらん
知らねど清き色はもつ
ちりさへすえぬ面影の
清きをめでゝ汝にのみ
神はるみをや教へけむ

汝が かざし のしら露も
なみだ とかはる 袖の上
人と 生れし はかなさよ

うつろひ 易き 世の中
つれなく 行くも 止るも
變らで あるは いつ迄ぞ

荒しい ほりに 残るとも
ゆかりの 色のあせゆくを
あはれむ 人はな かるらむ

さとらば 頓て 汝が身の
假の 榮えを ふりすて
世をは なれず やはな 董

立より みれば 一しほに
花の ゑまひの たをや かに
世を 厭はし き色も なし

世は 我のみの 世ならぬを
せまき 心に あやまりて
手折らば 仇となりぬらむ

別れの笑をそのままに
ながため神は守らむ
さらばよ董ささくあれ

あとり守

より来る氷魚は多加れば
廿日の月ののぼりしを
いで歸らんとあじろ守
病める妻あそ家に待て

待ち侍らんと術かまかかにも
應へし聲をたのみにて
歸れば月はのぼれども
月待つ人は世にあらず

月さへ山をはなれなば
 背戸の柳にかけさすを
 幾たび見てもろの影の
 見はぬ柳をうらみけん
 今かくとつきかけを
 のぼるを待ちし心根は
 汝もわれもかはらねど
 かくかはりしは何故ぞ
 月ののぼるや後れけむ

妻やあの世に急ぎけむ
 前にゆく身も後るゝも
 いづれ落ちゆく西の空
 傾むく影は惜まねど
 せめてはつまの一言を
 臨終いっせにきかぬ本意なさの
 うらみは月に残るなり

浦なれ衣

蟹のすむてふ須磨の浦
影うちかはす松が枝の
むら立つ磯の淋しきに
うらなれ衣ぬきすてゝ
木のまに掛し主やたれ
静かにかよふうら風に
長きくろ髪なびかせて
白きはだへに物かけず

身をもたせたる舷の
浅瀬に立つはろの主か
塵の浮世をはなれても
流石は月にはぢらひて
背きがちにぞわけ来る
葦の若葉のうちろよぎ
あや織る浪も静かなり
磯にのぼりて蟹の子の
玉の藻屑をうちはらひ

亂れし髪をしぼりつゝ
小櫛を口にふりかへる
清きおもわに月さして

はれ渡る都の富士のよき朝に
玉なす和子をあげたまふらむ

柿は取りぬ芙蓉は枯れぬ水はやせぬ
銀杏は散りぬ秋はをはりぬ

残る心

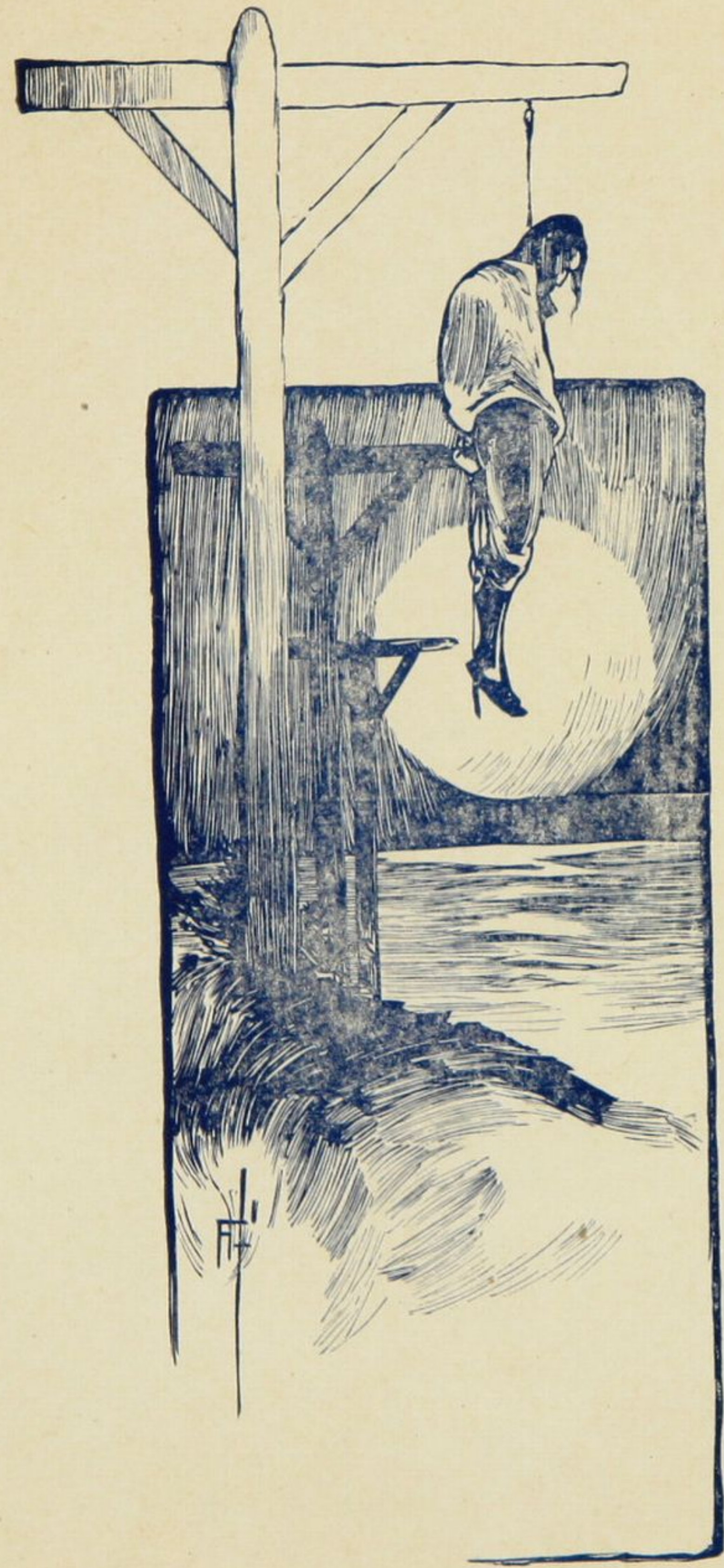
今日もまた
知らぬ野山を踏越へて
泪はそでにかゝらねど
はらひもあへぬ道芝の
露にぬれたる旅ごろも
あせゆく色をいかにせむ

菴のいへにやすらへば
菴はふ

賤の少女のたちいで、
もてなしぶりの優しさに
年はいくつと打とへば
袖もて顔をかくしつゝ
はぢらひて
立てる姿はふるさとに
置きてわがこし吾妹の
わすられがたき而影に
親しくむかふ心地して
世にはありけり似し人も

おもひ出の
たねとならんも心うく
情をこめてにあやか
とむる袂をふりはらひ
ふりかへりつゝ越來れば
さても山路の險しさよ

野分して草はしごろになりけり
糸秋の花さふらんの花



罪の終

光かくれしうみの上を
新たにすべく沙に乗りて
わが世の岸に月は寄せぬ
人を罪より死にみちびく
たかさ柱はいそに立てり
費の多さをかたるごとく
いかに墓場の美しくきよ

苦痛を拭ふつきのひかり
いたゞく空は神つくれり

罪と謂ひまた善と謂ふも
彼のちからに任せたれば
人の子なにを諫め得んや

王者の權を陸に張れど
海は居るにひとをとはず
浪能くいくさの船を覆す

弱きは罪にまけたるなり
愛を説かんは智慧に遠し
闇にうちふる劍うばへ

征矢獵矢

春月

遠き神代にはしきやし
清き少女のありけるが
冴えし光におもはゆく
我背の許をとひかねて
戀の恨みにはてしより
末の世までも春の夜の
つきは朧となりけり

山

山の名に負ふ妹と背の
なかをへだつる吉野河
散りくる花を浮べては
いづくの里に流れゆく
水と花とのしたしみは
春くる毎にまされども
思ひありげにいつ迄も
わかかれて立てり妹背山

女

少女の前に頬を染めし
君はあまりに若かりき
みやこの塵を吹く風も
なびけぬものか振の袖

戀

妹背の中のかたらひは
隔てぬうちに隔てあり

人目を忍ぶこひ路には
隔つるうちに隔てなし
いつれか戀のまことなる

其姉は

月に向ひてつぶやきし
吾聲をしもきくにけん
五つになれる弟の
物問ひたげに近よりぬ
訝かる様もことわりよ

なれがまだみぬ姉様の
呼べば答ふるあの空の
月のみ國におはすなり

教ゆるまゝに姉さまと
二聲三こゑ呼ばれは
小笹の風におともなく
葉末の月のこぼれけり

磯づたひ

月明く

松風くらきいそつたひ
面わ背げて行くはたろ

戀ならば

母や待つらんとく歸れ

近くは家もみえざるに

世をすねて

月を追ひゆく途ならば

語れやきかん君がうへ

戀とみて

答めん人のありもせば

をかしからずや手弱女よ

露と薔薇

花は散れよとすゝむれど

露はちらじとすがりつゝ

うれはしげなる花薔薇

かさしにせんと妹の

仇のすさみに手折りけり

露の宿りはかはらねど
花はうらみに萎れつゝ

夢の別路

うつゝに見ゆぬ面影を
かへす衣にうらみつゝ
片しなく小夜の袖まくら
夢見るうちには夢ならで
現とこそはむつみしが
覺めて跡なき別路の
はてを雲井に求むれば

落ちゆく星のかけ淡し

山の宿

都になれしあてびとよ
一夜は來ませわが宿に
ましらの聲を友として
榎火の傍によもすがら
語り明してかへるさは
庭のさゝ栗えだながら
都の土産にまゐらせん

寺

幾帝陵ををろがみて
あきかぜ近し二子やま
河州の露にそぼぬれし
袖のひまより打みれば
亂松一路藤井寺
袖しぐれ
時雨ばらつく日の暮に
わたる土橋の枯すゝき

なさけを包むその袖の
花が濡れよに友禪の

帯や着物はろろへるに
何が揃はて今日までも

さめてまる寐の詫しさに
夜半のかがみや薄化粧

聞かぬふりすりや尙高く
聲をそろへてひな歌の

誰れがいとしや廿五や六で
紅い八つ口ひらくと

京

春さめしめる絃の音に
うつやつみの白柏子
ろでにたよふ水色の
浅きはまひか加茂河の
瀬々の流れに幾千々の
か弱き身をやら任せてし

さとりさどらぬ幾春の
花はうつろふひがし山

春

霞となびき水と行く
春のおろは深けれど
八重に一重に亂れても
にほひを知らぬ椿あり
さくらと香り梅と咲く
春のころは廣けれど

若菜摘みゆく野の末に
つばみを持たぬ小草あり

海酸漿

戀に燃ゆるらむ少女子の
ぞの唇にふくまれて
優しき音をぞ出すなる
うみ酸漿よわだつうみ
光といかぬみなるこの
汐のうちに住りなれて
浪のまにくゆきし時

世に出でよとは汝が爲に
いかなる神のさゝやきし

紅き薔薇白き薔薇

あしたの露を清してふ
紅き薔薇を持てる子よ
ゆふべの露を清してふ
白き薔薇を持てる子よ

あかき薔薇のひらく時
朝のつゆにひかりあり

しろき 薔薇の 萎むとき
 タの つゆに うれひあり
 一人は 爲れよ 笑の子に
 一人は つねに 涙あれ
 笑とな みたを 與ふなる
 神はいづれも 清ければ

無
弦
弓
終

明治三十三年十二月廿八日印刷
 明治三十四年一月一日發行
 明治三十四年三月廿九日再版

定價金參拾錢

山縣操

東京市神田區南甲賀町八番地

河井幸三郎

東京市本郷區根津須賀町十八番地

菅北乾之助

同市神田區美土代町三丁目四番地

壽賀北印刷所

同市神田區美土代町三丁目四番地

不許
複製

發行所

東京市神田區南甲賀町八番地

内外出版協會

(電話本局四百三十八番)

誌 雜 行 發 會 協 版 出 外 内

文 庫

文庫は明治二十二年の創刊にして隆替常なき
 文學雜誌中最古く最堅固に發行部數最多く讀
 書社會に最勢力を有す 近來本誌の雄風を羨みて模倣するもの
 相踵ぐを以て觀るも其版圖の益々擴大
 するを知る 本誌の特色は虚名なくして實力ある天
 下の秀才を一堂に招き集むるに在り凡そ新文
 士を待つこと最自由に最公平なるは本誌に若
 くはなく趣味の清新材料の豊富亦竊に自ら許
 す所 その徹頭徹尾青年作家の紹介を以て自ら任じ未だ曾て渝らざること十
 年一日の如くなるは明治文壇空前の事業にして又本誌の獨壇世の名を
 青年雜誌に假託して事實は却てこれと表裏
 するものと自ら其撰を異にするを確信す 天下の俊髦冀くは競
 うて趨り來り本誌の微志を成さしめよ

毎月一回十五日發行○定價金拾貳錢○六冊前金六拾六錢○拾貳冊前金壹
 圓貳拾錢○一ヶ年(臨時増刊四冊共)前金壹圓六拾錢○郵稅壹錢宛

洪谷
 道玄坂
 玄誠堂